

エリウゲナにおける創造論の構造

今 義 博

言われているように、確かにエリウゲナの哲学は「中世の最初の偉大な体系」(F. コプルストン)である。しかし、彼の叙述の仕方は体系的ではない。また、彼の思想の中に流れ込んでいる様々の理論や概念の多くは複雑な哲学史的水脈を経たものである上に、彼はそれらを「大規模な独創的な思弁」(同)によって換骨奪胎している。それゆえ、彼の思想の中に創造論の理論的構造を探り出すことはそれほど容易ではない。そのことを行うのには別の途もあろうが、本論ではまずエリウゲナの思惟の特性と創造論の理論的性格を理解するために彼の方法論とその構成に光を当て、次いで創造論全体の理論的枠組みの概要を彼の存在論的原因論によって示そうと試みる。

エリウゲナの創造論の内容を構成している諸々の理論や概念についての具体的な論究はここでは避けられる。それは今後の課題である。

1 肯定神学

エリウゲナは肯定神学 (*θεολογία καταφατική*, *theologia affirmativa*) と否定神学 (*θεολογία ἀφοφατική*, *theologia negativa*) の理論をその創唱者である偽ディオニシオスから、そしてその継承者にして普及者である証聖者マクシモスから学んだ。これら二つの理論の内容を要約してエリウゲナはこう述べている。「一つは否定神学で、それは、神の本質ないし実体は、存在するものども、すなわち語られうるものども、あるいは理解されうるものどものうちの或るものである、ということを否定する。それに対して、もう一つは肯定神学で、それは、神の本質ないし実体についてすべての存在するものを述

語するのであって、そのためにそれは肯定的と言われる。ただし、その場合、神の本質ないし実体が存在するものどものうちの或るものである、と断定するのではなく、神の本質ないし実体によって存在するすべてのものが、神の本質ないし実体について述語されうる、ということを読くのである²⁾。

肯定神学は、有限性を根本特性とする被造物において認められる属性を、絶対的に無限なる神に対して適用する。この肯定神学の可能性の根拠は、無限なる神によって有限なる被造物が存在せしめられているということ、すなわち、無限なものとの有限なものとの存在論的關係に求められる。その存在論的關係は創造論の主要なテーマであるが、エリウゲナにおいてはより具体的には原因論や分有、神現（テオファニア、*theophania*, *apparitio dei*, *manifestatio dei*) の理論において示される²⁾。彼の原因論については後で触れるが、神が万物の原因として万物を造ったという創造の思想に立つならば、一切のものはその結果であるという因果關係が認められ、その因果關係は存在論の根本的規定となる。したがって、あらゆるものが神という原因の結果であるという仕方で根本的に規定され、あらゆるものは存在すること自体で原因への關係を指し示すものとして理解される。それゆえ、「原因されたものによって原因するものは表示される」³⁾と考えられる。すべての被造物は結果として、存在することによって、すでに原因である神を表示しているのである。このことが肯定神学の可能性を根拠づける。「神について述語されうるすべてのものは神によって存在するのであるから、最高のもから最低のものまですべてのものが一種の類似や不類似によって、また矛盾や対立によって、神について述語されうるということとは不合理なことではない」⁴⁾。

次に、神現の理論の内容は多様であって一概に述べることはできないが、いまの議論との関連で言えば、神現とは、万物の原因である神は、結果である万物に自らを現わすということであり、また神の現象としての被造物そのもののことである。例えば、次のように述べられている。「神の存在はそれ自体としては捉えることができないけれども、それが知性的被造物に結合されるならば、それは不思議な仕方で現れるのである。その結果、前者つまり

神の存在は後者つまり知性的被造物においてのみ現れるのである。実際、万物において理解へ立ち現れるのは神の存在以外の何ものでもないが、神の存在の言い表すことのできない卓越性はそれを分有するすべての本性を超越しているのである。神の存在はそれ自体としてはいかなる仕方でも現れないのである⁵⁾。かくて、神の本性はあらゆる被造的な事物によって言い表される。「肯定神学は、神が真理、善、存在、光、正義、太陽、星、霊、水、獅子、熊、虫、その他無数のものである、と言う」⁶⁾。

このように、すべてのものは自己の原因としての神を表示しているとはいっても、原因と結果が互いに無限に隔たった他である以上は、結果は直接的に原因を表示するわけではない。万物は神の結果として、また神の現れとして「神の比喩」(diuina metaphora) なのである。肯定神学においては被造的名称が「被造物から一種の神の比喩によって創造主に関係づけられる」⁷⁾。それゆえ、神の本性そのものからすれば、肯定神学は「比喩として」(metaphorice, per metaphoram, translate, translative, modo translationis, figurata loctione) 述べられるにすぎない。

2 否定神学

神の本性はそれ自体としてはあらゆる被造性を超えているがゆえに、被造物の側からは神の本性そのものを決して捉えることができず、言い表すことはできない。それゆえ、エリウゲナは偽ディオニシオスとともに次のように言う。「動詞や名詞や明瞭な言葉のいかなる表現によっても万物の最高にして原因的な本質は表現されえない」⁸⁾。このような「本来の意味では神について何も語ることはできない」⁹⁾という洞察に基づいて、否定神学は、神に関するあらゆる肯定的言表の否定として、あらゆる否定的言表を行う。神についての否定的言表は比喩の否定として「本来の意味で」(proprie) で言い表される。否定神学は神についての言表の意味を比喩の次元から本来性へともたらず。それゆえ、否定神学は肯定神学よりも一層神に接近する道である。「神は神について述語されるものどものうちの或るものである、と肯定されるよ

りも、否定される方がより真である」¹⁰⁾。そして神についての肯定を否定することは、被造物から創造主への関係づけを否定することとして、神についての被造的類似性を不類似性へ、被造物との因果関係を無関係、すなわち絶対性へと止揚する。その意味で否定神学は神を「無」(nihil, nihilum)として指し示す。

3 第三の神学

有限な被造的次元領域においては、同一の事柄に関して肯定と否定は互いに対立し相容れないが、無限な神的次元領域においては肯定と否定は統一される。「君が徹底的な思惟によって直観に達するときには、互いに反対であると思われるこれら二つのものは、神の本性に適用される場合には、決して互いに対立せず、あらゆる点で完全に互いに調和しているのを君は充分明瞭に見るであろう。このことがもっとはっきりするように少し例を示そう。例えば、肯定神学は『それは真理である』と言う。否定神学は『それは真理ではない』と反駁する。ここには一種の対立があるように見えるが、しかしもっと細心に洞察するならば何の衝突もないのだ。というのも、『それは真理である』と言うのは、神の実体が本来の意味で真理であるということを肯定しているのではなく、そのような名前が被造物から創造主へ転義して呼ばれうる、ということ肯定しているのであるから。実際、本来の意味の衣をすべて剥ぎ取られ、除き去られた神の本性に対して、肯定神学はそのような呼び名で衣を着せるのだ。一方、『それは真理ではない』と言うことは、神の本性が捉えられず、言い表せないものであることを正しく明晰に認識した上で、それが存在するということを否定するのではなく、それが本来の意味で真理と呼ばれたり真理であるということを否定するのである。実際、肯定神学が神性に着せた意味の衣を否定神学がすべて残らず剥ぐのである」¹¹⁾。

ここには肯定神学と否定神学の関係が明瞭に示されている。「互いに反対であると思われるこれら二つのものは、神の本性に適用される場合には、決して互いに対立せず、あらゆる点で完全に互いに調和している」と言われる

が、それは、肯定神学は神についての否定の肯定として否定神学を前提し、また否定神学は神についての肯定の否定として肯定神学を前提しているということの意味している。つまり、肯定神学と否定神学は確かに肯定と否定によって互いに対立するのであるが、しかしそれ以上に、互いを前提し互いを支え合って成り立つことによって、対立を超えて調和しているのである。肯定神学と否定神学はそれぞれの言表の意味作用の質の差異によって相互補完的なのである。それゆえ、「神の存在(本質)の諸々の肯定と諸々の否定とは一致する」¹²⁾と言われる。言わば、エリウゲナにおけるこれら二つの神学は車の両輪であり、また裏があって表があり表があって裏がある一枚の紙の表裏である。この点はエリウゲナの哲学を理解する上で一つの要である。

肯定神学と否定神学が対立を超えて調和し統一される根拠は神性そのものにある。「神は、存在するものと存在しないものすべてのものどもの、また、存在しうるものと存在しえないものすべてのものどもの、また、神と対立したり矛盾していると見えるものすべてのものどもの、要するに、類似のものどもと不類似のものどものすべてのものどもの囲いである。というのは、神は類似のものどもの類似、不類似のものどもの不類似、対立するものどもの対立、矛盾するものどもの矛盾であるからである。というのも、神はこれらすべてのものを美しく言い表し難い調和によって一つの和合へ集めて統一するのだから」¹³⁾。神は「無限なるものどもの無限」(infitas infinitorum)として「無限以上」(plus quam infinitum)であり、「単純なるものどもの単純」(simplicium simplicitas)として「単純以上」(plus quam simplicem)であるように、「対立するものどもの対立」(oppositorum oppositio)として対立以上であり、「矛盾するものどもの矛盾」(contrariorum contrarietas)として矛盾以上である。そのように一切の対立と矛盾を超えつつ、一切の対立と矛盾の根源、一切の類似と不類似の根源であるという仕方で、神は「すべてのものどもの囲い」(ambitus omnium)なのである。それゆえ、神は存在であると同時に存在ではなく、万物であると同時に万物ではなく、神であると同時に神ではない。

このように、神についての肯定と否定は統一されるべきものである。エリウゲナは肯定の道と否定の道を統一する第三の道に明確な形を与え、肯定の道と否定の道に対して固有の位置を与えた。それは言わば超越の道であり、肯定神学と否定神学とに対して仮に「超越神学」ないし「超神学」とでも呼ぶことができるであろう¹⁴⁾。これら三つの神学による表現の仕方は例えばそれぞれ次のようになる（〔 〕内は筆者の補い）。「神は存在と呼ばれる〔肯定神学〕が、しかし本来の意味では神は存在ではない〔否定神学〕。存在には非存在が対立するからである。それゆえ、神は *ὑπερούσιος*、つまり超存在である〔超越神学〕¹⁵⁾。「超越神学」は肯定神学と否定神学の両者の対立を調和している。すなわち、「超存在、真理以上、知恵以上、その他同様のもののように、『超』(super) や『以上』(plus quam) という小辞を付けて神について述べられるこれらの名称は述べた神学の二つの分野をまったく完全に含んでいる。つまり、発音において肯定の形を、意味において否定の力を持っている」¹⁶⁾。この引用では「超越神学」は表現形式としては肯定神学を、意味内容としては否定神学を含むものであるとされているが、述べたように、「超越神学」は肯定と否定を超越しつつ、肯定と否定を根拠づける仕方で肯定と否定とを調和し、包括し、統一する。

このように、三つの神学は肯定 (esse) と否定 (non esse) と超越 (super, plus quam) の弁証法的な構造において相互に関連している。このことは次の句において一層良く理解されるであろう。「初めにわれわれはカタパティケー、つまり肯定で、名詞によってであれ動詞によってであれ、本来の意味ではなく比喩として神についてすべてのものを述語する。次に、アポパティケー、つまり否定によって、比喩ではなく本来の意味で、神はカタパティケーによって述語されたもののどれでもないと否定する。（というのも、神は神について述語されるものどものうちのどれかである、と肯定されるよりは否定される方が一層真なのだから。）その次に、万物を造るが、しかし自らは造られない超存在的な本性が、神について述語されたすべてのものを超えて、超存在的に超越的に讃えられなければならない」¹⁷⁾。

4 創造論の弁証法的性格

以上に見た神学の性質からすれば、神は万物を「造る」とか、神は万物の「創造者」であると言うことが肯定神学に属することは明白である。したがって、神の創造ということは本来の意味で言われるのではなく、神の本来性からすれば比喩として言われるのである¹⁸⁾。本来の意味ではむしろ否定神学に従って、神は創造しない、と言われるべきである。なぜなら、神は「創造する以上」(plus quam facere) であるから¹⁹⁾。しかし、エリウゲナは神による万物の創造という思想を確信しており、それをいささかでも疑っていないことはまったく明白なことである。それゆえ、神による万物の創造ということが本来の意味で言われるのではないとする見解は神の創造の思想そのものを否認するものとして解釈されるべきではない。否定神学の特性からすれば、神は創造しない、と否定することは神について「より真」(uerius) なる言表をすることである。否定神学と「超越神学」とが神の創造を本来の意味で否定するのは、神の創造が決して本性に必然的なものではなく、自由意志によるものであることを示しているのである。「必然のあるところには意志はない。ところが、神には意志がある。それゆえ、神には必然はない。まことに神は万物を自分独自の意志で造ったのであって、決して必然的に造ったのではない。じっさい、何が神を強いて或るものを造らすだろうか。……神にとっては存在と意志は別ではない。神にとって存在することは即ち意志することでもある。それゆえ、もし神の意志が自由であるなら——じっさい、そう信じないならば不敬虔なことである——、自由な意志には一切の必然はない。それゆえ、どのような必然も神の意志を所有することはない」²⁰⁾。

「創造」という概念は確かにどこまでもわれわれの有限な思惟に属するものであり、したがって、われわれはこの概念によって神の創造行為を完全には捉えることはできない。しかし、そうだからといって、われわれが神について創造という概念で考えたり、その言葉で表現することはまったく無意味だということにはならない。確かに、「神はなにものによっても限定されず、

かえって万物を限定する。それゆえに神は万物の原因なのである』²¹⁾とされているように、無限なる神の本性をわれわれの言葉や思惟によって限定することはできない。しかし、神が「無限であるとともに無限以上」としてわれわれの有限な言葉や思惟を有限なものとして根拠づけているのだから、神はわれわれの言葉や思惟が有限な仕方でも神を表示し把握することができることの根拠なのである。神について述べられるわれわれの言葉は「神が表示されるのを許している限りで、言い表すことのできない神の存在を指し示すのである」²²⁾。それゆえ、神の創造の問題は「創造する以上」である神による万物の創造の問題なのであり、したがって、エリウゲナの創造論は肯定神学、否定神学、「超越神学」の弁証法的連関において展開されているのである。

ところで、プラトンの『ソピステース』以来、弁証法は「同」(ταυτοτης)と「異」(ετεροτης)をその基本契機とすることによって、一と多の弁証法である。すなわち、弁証法は同の側面において多から一への統一(ενωσις)という上昇運動と、異の側面において一から多への区分(διακρισις)という下降運動の往還運動から成る²³⁾。そして弁証法がたんに思惟の論理的方法であるばかりでなく、存在の構造連関そのものでもある²⁴⁾がゆえに、すべてのものは、分化と統一の弁証法によって、最高の普遍的・一性においてあるものから最低の特殊的多性においてあるものに至るまでヒエラルキアの構造連関において位置づけられ理解される。

エリウゲナは統一という上昇的弁証法によって、神と被造物とを、「存在するものと存在しないものすべて」を含むところの「自然」(φύσις, natura)という最も普遍的な概念の中に包括して、一切のものを統一的観点のもとに考察した²⁵⁾。そのような普遍的、統一的な思惟態度の基礎には、神と被造物とをそれぞれ別な独立の原理として捉える二元論を克服しようとする意図がある²⁶⁾。他方、彼は区分という下降的弁証法によって、神と被造物の区別を、その最も普遍的な「自然」の「第一の、最大の区別」²⁷⁾であるとみる。その区別は無限に、一様に、普遍的・自然の一切のものを貫徹しているからである²⁸⁾。このように、神と被造物の関係はエリウゲナの思惟において統一と区分の弁

証法によって動的に捉えられている。

5 存在論的原因論

それゆえ、彼の創造論の構造は同と異の、一と多の弁証法によって規定されている。ここから、創造者である神が「存在しなかったものから存在するものへ」(ab eo quod non erat in id quod est), 「非存在から存在へ」(ex non esse in esse), 「無から存在へ」(de nihilo in esse) と被造物を導き出すこととしての創造は、不変で永遠の一性が可變的で時間的な多性へと発出ないし下降することとして捉えられる。

そのような創造の考え方の基本にある理論は存在論的原因論である。それは哲学史的には主として偽ディオニシオス、さらにはネオ・プラトニズム、それもとりわけプロクロスの存在論的原因論に溯源することができるであろう。エリウゲナはそれを体系的にまとめて論じてはいないが、その理論の大枠は同と異の弁証法的構造の上にさらにいわゆる、止留 (μονή) —— 発出 (πρόοδος) —— 還帰 (ἐπιστροφή) というトリアス (trias, 三つ組) の構造的概念が重なった構造を持っている。簡潔にその要点をまとめれば、それは次のようなものである。或る特定の原因から或る特定の結果が直接的に生じる単一の因果関係においては、原因と結果は互いに異なるものであるが、結果が生じる以前に結果が原因の中に留まっている (止留 *mansio, manere*) 限りで、結果は原因と区別されないもの、原因と同じものと考えられる。しかし、他方、結果は原因から発出 (*processio, procedere*) する限りで、結果は原因と異なるものとして現れるが、しかし、原因はその生じた結果の中に滞留 (止留) しているのであって、その限りでは依然として結果は原因と同じものであり続けると考えられる。そして、原因は結果を発出しても不変に、増減することもなく自己自身に留まって (止留)、生み出した結果を再びその源である自分の方へいわば呼び戻す (還帰 *reditus, redire*)。

ここで、原因としての神と結果としての被造物が互いに他であるのは、そもそも神の絶対的に超越的な、完全に単純な自己同一性とその万能によって

被造物を他として造ったがゆえである。「創造的本性は、超存在的であるがゆえに、自己において造るものとは異なるものである」²⁹⁾。神は万物とは異なるものとしてどこまでも万物から離れていながら、万物を自己自身の内に造る。「みことばは自分自身の内になるものとして、完全なるものとして、完全なるもの以上のものとして、万物から分離したものとして、自存しながら、自分を万物へと拡散するのであり、その拡散が万物なのである」³⁰⁾。これら二つの引用に見られるように、神と被造物との存在論的差異は被造物に対する「超存在性」(superessentialitas)と「自存性」(per se subsistere)によって示される。後者について言えば、「神は自存し、自分に先立つものから存立を受けるということは決してない」³¹⁾のに対して、神の内なる原初的諸原因も含めてすべての被造物は自存しえないのである。しかし、そのように神と被造物とが互いに他であるとは言え、被造物は神の万能によって造られたものであるから、「互いに独立的に対立し合う二つの原理」ではない³²⁾。その意味で、創造論の因果関係における異は、神の力の内なるものとして、ある種の同における異である。

そもそも原因と結果の同と異は全体として一つの因果関係を現実に成立させる二つの契機を成しているのだから、神と被造物の異他性は互いに他を排斥して相容れない対立関係ではない。「神の外には何もない」(extra deum nihil)のだから、創造の一切は「神の内」(intra deum)でのことである。それゆえ、述べたように、自己同一なる神が他を創造したのであるから、異はある種の同における異であり、同は異における同である。このように、創造論における原因と結果の同が異における同であることによって、汎神論は避けられ、また異について異が同における異であることによって二元論は避けられる。そのような性格を持つ同と異は、創造において原因と結果を媒介する「分有」(participatio)という概念(「分配」(distributio),「拡散」(extensio),「多様化」(multiplicatio),「注出」(diffusio),「流出」(emanatio),「神現」(theophania),「顕現」(apparitio, manifestatio)等の概念についても同様に)に含意されている。

因果関係が、原因と結果の同と異の対立的な二つの契機を弁証法的に統一する理論構造を持っている理由は、「超越神学」について見たように、絶対的超越性における神が同と異という対立を超えつつ、同と異という対立するものを根拠づけるからである。つまり、完全な単純性、一性として自己同一なる神はいかなる他性からも絶対的に隔絶していながら、従って他のものからではなく、自己自身からのみ他のものを、自分に似たもの（同）も自分に似ないもの（異）も造るのである³³⁾。

神はその被造性からの絶対的超越性、すなわち「超存在性」のゆえに「無」(nihil)と言われるが、この無は存在の単純な全面否定としての「全くの無」(omnino nihil)でもなく、「欠如的無」(nihil priuatum)でもない³⁴⁾。一方、「無からの創造」(creatio ex nihilo, creatio de nihilo)³⁵⁾の「無」は決して「何か或るもの」(aliquid)でもなく、「無」と言われる「無形の質料」(materia informis)でもなく、神に等しく神に対立する何らかの原理でもない³⁶⁾。しかも「神の外には何もない」がゆえに、「神の超存在性の卓越性」としての「無」、つまり神そのものである「無」は「無からの創造」の「無」と解釈される。

「このように神は無から万物を造る。すなわち超存在性から存在を生み出す」³⁷⁾。神は無である自分自身からすべての存在を創造する。それゆえ、創造とは「現れぬものの現れ、隠れたものの顕現、否定されたものの肯定、把握されえないものの把握、言い表しえないものの言い表し、近づきえぬものの近づき、理解されえないものの理解、物体ならざるものの物体、超存在的なるものの存在、形なきものの形、計りえぬものの計り、数えられえぬもの、の数、重さなきものの重さ、精神的なものの物質化、不可視のもの、の可視化、場所なきものの場所、時間なきものの時間、無限のもの、の限定、包囲されえぬもの、の包囲」³⁸⁾と言われるのである。

6 止 留

本論では創造の問題が主題であるから、以下においては原因論の中の止留と発出の面に焦点を当てることにする。さて、止留の概念には、ネオ・プラ

トニズムにおいては原因が結果の産出において不変の自己同一性を保持するという意味と、結果が結果として現れる以前に予め原因の内に滞留しているという意味の二義があった³⁹⁾。それに対して、エリウゲナは原因が自分の生み出した結果の中に含まれるというもう一つの意味を考えた。以下に、止留についてのこれら三様の考え方がエリウゲナにあったことを具体的なテキストの引用によって示し、その内容を一瞥しよう。

最初の意味での止留は、存在を絶対的に超越した神が不変不動のままに、「不増不減」(nec augeri nec minui, nec maior nec minor, nec multiplicatur nec minuitur)⁴⁰⁾に万物の原因として万物に存在を与えることである。例えば、次のように述べられる。「神は自己自身に常に不変に留まり、万物を満たすのである」⁴¹⁾。また、「神の力は自分で自分において不変に永遠に留まりながらも、万物がそれによって、それにおいて存立し非存在から存在へと導かれるのである。というのも、それが存在することによって、万物は無から存在へ発出し万物を自分へ引き寄せるのだから」⁴²⁾。

原因の中で予め結果が留まっているという意味での止留についてはこう述べられている。「原因は、もしそれが真に原因であるとすれば、自己自身の内に、自分が原因であるところの万物を最も完全に予め含んでいて、結果が何かにおいて現れる前にその結果を自己自身において完成している。そして結果が生成によって諸々の類や諸々の可視的な種へ現れ出るときも、結果は原因における自己の完全性を捨て去ることはなく、原因の内に十全に不動に止留し、自らがそこにおいて同時に永遠に存立している一つの原因以外にはどんな完全性をも必要としない」⁴³⁾。神の創造の結果である万物は被造的世界において存在する以前に原因である神の内にある。神は自己自身に留まるとともに、その自己止留において、結果すべき万物を原因として自分自身の中に包括している、「結果は原因によって引き起こされたものであり、原因によって引き起こされたものはすべて常に原因の中に自存する」⁴⁴⁾。それゆえ、結果としての万物を原因としての神が結果の現出に先立って包括することから、「神は万物の原因として万物である」⁴⁵⁾と言われることになる。

生じた結果の内に原因が止留するという意味は神の被造物への内在の思想に展開されるとともに、エリウゲナ独自の神現（テオファニア）や神の自己創造、ないし「神は被造物の中に造られる」という思想にも展開される。創造的原因はそれ自身によって一つのものとして不変でありながら、それから存在を分有した「万物に内在」(omnibus inesse) し、「万物に止留」(in omnibus permanere) する。しかも、それは万物に現存しても「不増不減」のまま不変である。ここで注意しなければならないのは、そのような見解は「自存」しえない被造物の存在が、あらゆる存在の始原である神からのみ由来し、決して神以外の何ものからも由来しないということ、つまり、被造物の全存在がただ神の存在にのみ依存しているということの強調なのである。しかし、まさにこの意味で、「神は自分の結果の内に造られる」⁴⁶⁾とか「神は万物である」と言われうる。例えば、「結果は造られた原因にほかならない」とか「自分の本性と異なるものが原因からその結果へ発出することはない」⁴⁷⁾ という表現もこの点を表したものである。しかし、神の万物における止留や内在ということは神的存在が万物によって分有されているということなのであって、その逆ではない。つまり、それは神が万物に包括されるということではなくて、「包括されることなく自分自身の内に一切を包括する」(in circumfinite totum in se ipso coambiens)⁴⁸⁾ ところの神によって神的存在が万物に「分配」(distributio) されることなのである。だから、結果における原因の止留や内在の肯定は原因と結果の存在論的差異を指示することによって否定されなければならない。その否定によって「より真」なるもの——「神はこれでもなく、あれでもない。ここにもなく、あそこにもない」⁴⁹⁾。——が補われるからである。

結果の原因の内での止留においても、原因の結果の内での止留においても、「神は万物である」という表現は、見た通り決して汎神論のものではない。それらの表現とその意味についてのエリウゲナの入念な思索は例えば偽ディオニシオスの「万物の存在は存在を超えた神性である」⁵⁰⁾ という言葉によって強く動かされていることを一言付け加えておく。

7 発 出

神が万物の原因であるということの内には「神は第一の原因」(principalis causa)であることが含意されている。つまり、神だけが万物を造るのであり、しかも神は他のなにものによっても決して造られることがないから、神を造る他の原因は存在しないし、神に先立つ始原はない。「神の本性は万物の始原にして原因である——というのは、それは *ἀναρχος, ἀναίτιος*,つまり始原のないもの、原因のないものであるから。じっさい、その前に始原や原因としてそれに対して立つものは何もなく、それが原因にして始原となるところの万物の本性をそれ自身が造るのである」⁵¹⁾。

創造とは、超存在的な無である神が自ら「あらゆる存在の根源」(principium omnis essentiae)⁵²⁾となって自分自身から被造物に存在を付与することである。この神の創造的な存在付与はエリウゲナ独特のラテン語では *substitutio* と表されるが⁵³⁾、この神の創造の働き、あるいは創造者としての神はプラトン以来の伝統に従って「善」と言われる。「万物の原因、すなわち創造する善、それは神である。……というのは、存在しないものを存在へ呼ぶことが神としての善の特質なのだから」⁵⁴⁾。この善の創造は既に述べられたように原因からの結果の発出として説明される。

発出にはまず、単一なる神そのものの内部における神の一なるままでの三位格の発出と、創造としての神からの被造物の発出が区別される。前者は、「単純にして不可分の一」(*simplex et indiuiduum unum*)であるが、数における一でも「何か或一ではなく」(*non aliquid unum*)、普遍的にして無限なる一であり、「語られ理解されうるすべての一を超えた」一⁵⁵⁾、そのような一における父、子、聖霊の三位格への神の自己分化である。この神の自己内発出が「生成」(*generatio*)と言われるのに対して、後者、すなわち神の被造物への発出は「創造」(*creatio*)と言われて表現の上でも区別される。この発出は、確かに創造に係わる一切が神の力によるものであるから、「神の内」(*intra deum*)のものに違いないが、前者との差別を明示する場合は、その発出の第

一段階である原初的諸原因 (*causae primordiales*, イデア *ideae*) の発出も「神の後」(*post deum*) とか「神の周辺」(*circa deum*) の発出として区別される⁵⁶⁾。

そしてこの創造的発出はさらに、言わば「神の内」での発出と「神の外」への発出とに区別される。「神の内」なる発出とは、述べた原初的諸原因の発出であるが、それが「神の内」と言われるのはそれらが造られる場が「神のひとり子」すなわち「みことば」(*uerbum*) ないし「知恵」(*sapientia*)、したがって「始原」(*principium*) であるからである。父は子と聖霊の原因であり、原初的諸原因の創造の原因であり、聖霊は原初的諸原因の分配の原因である⁵⁷⁾。すなわち、父は万物を創造するのだが、万物は子において創造され、聖霊によって分配される。しかし、これらは三位一体の同一の働きなのである⁵⁸⁾。それは「最高の、三にして唯一の真なる善の自分自身における動くことのない運動」であり、「単純なる多様化、自分自身から自分自身における自分自身への尽きることのない注出」である⁵⁹⁾。

原初的諸原因はみことばにおいて造られたがゆえに、複数形の表現にもかかわらず、神的な「不可分の一」の最初の分有として「不可分の一」であり⁶⁰⁾、「同時に一度に永遠に」(*simul et semel et aeterniter*)⁶¹⁾ 造られて「永遠の時」(*tempora aeterna*)⁶²⁾ において存在する。永遠に存在するがゆえに、それらは時間的な万物に対して「真に存在する」(*vere esse*) と言われる。エリウゲナにおいて「真の存在」とは基本的に神的次元領域における存在のことである。また、原初的諸原因は時間的な被造物を造る原因として「万物の諸根源」(*principia omnium rerum*)⁶³⁾ である。ここに「造られ、造る」(*et creatur et creat*)⁶⁴⁾ というよく知られた原初的諸原因の規定が見出される。

「神の外」への神の発出は、原初的諸原因を通しての、神の時間的世界の創造、時間そのものの創造である。この発出において「存在しなかったものが時間的生成を通して存在し始めるがゆえに、それらが存在しなかった時があった」⁶⁵⁾ と言われうる。

三位格の生成と原初的諸原因の創造は共に神自身からの神自身による神自身への、すなわち「神の内」での発出であるから、神と原初的諸原因との間

には「等しい永遠性」(coaeternitas) が認められるべきだと考えられる。そう考えられる限り、原初的諸原因の存在は神の存在と「等しい存在」(coessential) と考えられる。ところが、万物は神の内に原初的諸原因としてのみ「真に存在する」、つまり、原初的諸原因は「真に存在する」万物であるのであるから、「ただひとり真に存在する神は万物の存在である」⁶⁶⁾と考えられることになる。これらの表現はエリウゲナ自身が証言しているように、偽ディオニシオスの「万物の存在は存在を超えた神性である」とか「神は万物の原因として万物である」という句の解釈なのである⁶⁷⁾。しかし、エリウゲナはこれらの表現が汎神論と誤解されやすいことを承知している⁶⁸⁾。すなわち、原初的諸原因は被造物である限り厳密には創造者である神と「等しい存在」ではない。創造者は被造物に優るからである。それゆえ、原初的諸原因は神と完全に等しく永遠なのではない⁶⁹⁾。したがって、これもまた偽ディオニシオスの句の解釈なのだが、神は自分自身を造るとか、万物において造られるという言葉は或る論者の言うように、「神は、自らは何ものでもない被造物においてその根拠になり、神が普遍的な根拠であるがゆえに万物において万物になり、万物である、という思想の強調なのである」⁷⁰⁾。ともかく神の存在は万物の存在の根拠であり、万物の存在は神の存在の分有(分与)なのである。

それゆえ、創造は被造物による神的存在の分有(participatio)としても理解される。分有を、ラテン語の participatio の語源が pars (部分) + capere (取る) であることに基づいて、「或る部分の取得」と解してはならない⁷¹⁾。エリウゲナはラテン語の participatio に相当するギリシャ語の μετόχη と μετουσία について次のように解釈する。μετόχη とは μετα-εχουσα、つまり post-habens (後から持つ) ないし secundo-habens (二番目に持つ) と解され、また、μετουσία は μετα-ουσια つまり post-essentia (後からの存在) ないし secunda essentia (二番目の存在) と解される。それゆえ、「分有とは上位の存在からそれに続く二番目の存在を発出することであり、第一の存在を持つものから二番目の存在をそれが存在するように分配すること」⁷²⁾ である。

この分有は「最高の段階から最低の段階に至るまで、上位の段階から下位

の段階へ」下降する⁷³⁾。そのようにヒエラルキアを成す分有の過程をエリウゲナはプロティノスを想起させる比喩で説明する。「初めに河全体が源から流れ出る。最初その泉から湧き出た水はその水路を通して常に絶え間なく及ぶ所にはどこへでも流れて行く。そのように神の善、存在、生命、知恵、そして万物の源において存在するすべてのものは、初めに原初的諸原因に流れ込み、原初的諸原因を存在させるのである。次いで、それらは原初的諸原因を通してそれらに適した宇宙の秩序を貫いて、上位のものを通して下位のものへ流出しながら、言い表し難い仕方ですべての結果へ下って行く」⁷⁴⁾。

註

Periphyseon (De divisione naturae) I, II, III, ed. by I. P. Sheldon-Williams (with the collaboration of Ludwig Bieler), *Scriptores Latini Hiberniae* VII, IX, XI, Dublin, 1968/1972/1981, libri IV, V: ed. H. J. Floss, 1853 (=PL 122). は *P.* と略記し、巻とそれぞれの版の頁を並記する。

- 1) *P. I, 74=458AB*: Vna quidem, id est ΑΠΟΦΑΤΙΚΗ, diuinam essentiam seu substantiam *esse* aliquid eorum quae sunt, id est quae dici aut intelligi possunt, *negat*; altera uero, ΚΑΤΑΦΑΤΙΚΗ, omnia quae sunt de ea praedicat et ideo affirmatiua dicitur—non ut confirmet aliquid esse eorum quae sunt, sed omnia quae ab ea sunt de ea posse praedicari suadeat.
- 2) Cf. 拙論「言い表せないものをいかに言い表すか——エリウゲナにおける存在論的根拠づけ——」, 『昭和 62 年山梨大学教育学部研究報告』第 38 号, 1987, pp. 33—45. 特に p. 40ff.
- 3) *P. I, 74=458B*: Rationabiliter enim per causatiua causalis potest significari.
- 4) *P. I, 192=510D*: Non autem irrationabiliter, ut saepe diximus, omnia quae a summo usque deorsum sunt de eo dici possunt quadam similitudine aut dissimilitudine aut contrarietate aut oppositione quoniam ab ipso omnia sunt quae de eo praedicari possunt.
- 5) *P. I, 54—56=450B*: Ac per hoc intellige diuinam essentiam per se incomprehensibilem esse, adiunctam uero intellectuali creaturae mirabili modo apparere ita ut ipsa, diuina dico essentia, sola in ea, creatura intellectuali uidelicet, appareat. Ipsius enim ineffabilis excellentia omnem naturam sui participem superat ut nil aliud in omnibus praeter ipsam intelligentibus occurrat dum per se ipsam, ut diximus, nullo modo appareat.

- 6) *P. I, 74=458B* : (ΚΑΤΑΦΑΤΙΚΗ) dicit enim esse ueritatem bonitatem essentiam lucem iustitiam solem stellam spiritum aquam leonem ursum uermem et cetera innumerabilia ;.
- 7) *P. I, 62=453B* : Non irrationabiliter, quoniam omnium quae in statu et motu sunt causa est.
Cf. *P. I, 74=458C* ; *I. 76=459C*.
- 8) *P. I, 68=456A* : Nulla uerborum seu nominum seu quacunquae articulatae uocis significatione summa omnium atque causalis essentia potest significari.
Cf. Pseudo-Dionysius, *De diuinis nominibus*, III, 3=PG III, 980C—981B.
- 9) *P. I, 190=510B* : nil de deo proprie posse dici.....
- 10) *P. I, 216=522B* : uerius enim negatur deus quid eorum quae de eo predicantur esse quam affirmatur esse.....
- 11) *P. I, 80—82=461B—D* : Intende igitur diligentius. Nam cum ad perfectae ratiocinationis contuitum perueneris, satis clarum considerabis haec duo quae uidentur inter se esse contraria nullo modo sibi opponi dum circa diuinam naturam uersantur, sed per omnia in omnibus sibi inuicem consentiunt; *et ut hoc apertius fiat paucis utamur exemplis*. Verbi gratia : ΚΑΤΑΦΑΤΙΚΗ dicit : Veritas est ; ΑΠΟΦΑΤΙΚΗ contradicit : Veritas non est. Hic uidetur quaedam forma contradictionis, sed dum intentius inspicitur nulla controuersia reperitur. Nam quae dicit : Veritas est, non affirmat proprie diuinam substantiam ueritatem esse sed tali nomine per metaforam a creatura ad creatorem uocari posse. Nudam siquidem omnique propria significatione relictam diuinam essentiam talibus uocabulis uestit. Ea uero quae dicit : Veritas non est, merito diuinam naturam incomprehensibilem ineffabilemque clare cognoscens non eam negat esse, sed ueritatem nec uocari proprie nec esse. Omnibus enim significationibus quas ΚΑΤΑΦΑΤΙΚΗ diuinitatem induit ΑΠΟΦΑΤΙΚΗ eam spoliare non nescit.
- 12) *P. IV, 758B* : diuinae essentiae affirmationes et negationes conveniunt,.....
- 13) *P. I, 206=517BC* : ipse est ambitus omnium quae sunt et quae non sunt et quae esse possunt et quae esse non possunt et quae *ei* seu contraria seu opposita uidentur esse, ut non dicam similia et dissimilia. Est enim ipse similitum similitudo et dissimilitudo dissimilium, oppositorum oppositio, contrariorum contrarietas.

エリウゲナの世界観はこの神性の見方に基づく。「じっさい、宇宙の諸部分において相互に対立し矛盾しているように見え、相互に異なっているように見えるもの、宇宙そのものの最も普遍的な調和において眺められるならば、和合し協調しているの

である。」 cf. III, 68=637Dff.

- 14) Cf. 拙論「エリウゲナにおける『超神学』と名づけられるもの」, 『文化と哲学』第7号, 1988, pp.32—51.
- 15) *P. I, 459D* : *Essentia igitur dicitur [deus] sed proprie essentia non est. Esse enim opponitur non esse. ΥΠΕΡΟΥΣΙΟC igitur est, id est superessentialis.*
- 16) *P. I, 84=462C* : *ut haec nomina quae adiectione ‘super’ uel ‘plus quam’ particularum de deo praedicantur, ut est superessentialis plus quam ueritas plus quam sapientia et similia, duarum praedictarum theologiae partium in se plenissime sint comprehensiuia, ita ut in pronuntiatione formam affirmatiuae, intellectu uero uirtutem abdicatiuae obtineant.*
- 17) *P. I, 216=522AB* : *prius de eo iuxta catafaticam, id est affirmationem, omnia siue nominaliter siue uerbaliter praedicamus, non tamen proprie sed translatiue; deinde ut omnia quae de eo praedicantur per catafaticam eum esse negemus per apofaticam, id est negationem, non tamen translatiue sed proprie (uerius enim negatur deus quid eorum quae de eo predicantur esse quam affirmatur esse); deinde super omne quod de eo predicatur superessentialis natura quae omnia creat et non creatur superessentialiter superlaudanda est.*
- 18) *P. I, 196=513A* : *Similiter si agens et actor, faciens et factor non iam proprie sed modo quodam translationis nominatur, cur non et agere et facere uel agi uel pati eodem locutionis genere praedicaretur?*
Cf. *P. I, 208=518B* : *Videsne ergo quemadmodum uera ratio kategoriam faciendi ex natura diuina paenitus segregat mutabilibusque ac temporalibus principioque ac fine carere non ualentibus distribuit?*
- 19) *P. I, 220=524AB* : *Vt igitur de eo praedicatur esse dum non sit proprie esse quoniam plus est quam esse et causa omnis esse et essentiae et substantiae, ita etiam de eo dicitur agere et facere dum sit plus quam agere et facere et causa omnium faciendi et agendi sine ullo motu qui secundum accidens possit intelligi super omnem motum.*
- 20) *De diuina praedestinatione liber*, ed. Goulven Madec, *Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis L*, Tournhort 1978, II, 1, pp. 9—10 : *Vbi autem est necessitas, ibi non est uoluntas; atqui in deo est uoluntas; in eo igitur non est necessitas. Deus quidem omnia quae fecit sua propria uoluntate nulla uero necessitate fecit..... Non enim aliud est ei esse et uelle; sed quod est ei esse, hoc est et uelle. Proinde si uoluntas dei libera est—aliter enim credere impium est—libera uero uoluntas omni caret necessitate, igitur nulla necessitas uoluntatem dei possidet.....*

- 21) *P. I, 98=469A* : A nullo enim diffinitur sed omnia diffinit: causa igitur est omnium.
- 22) *P. I, 210=518D* : suamque ineffabilem essentiam eo modo quo se significari sinit insinuant.
- 23) Cf. *P. I, 84=463Bff.* ; *I, 136=486Bff.* ; *V, 868Dff.*
- 24) Cf. *P. I, 154=494A* ; *V, 868D—869A.*
- 25) Cf. *P. I, 36=441Aff.* ; *III, 12—13=621A* ; *III, 30=621A* ; *V, 1019A.*
- 26) Cf. *P. III, 130=664C* ; *III, 160=678Cf.* ; *III, 162=679A* ; *III, 180=687Bf.*
- 27) *P. III, 30=621A* : Prima siquidem et maxima diuisio est uniuersalis naturae in creatricem uniuersitatis conditae et creatam in ipsa condita uniuersitate.
- 28) *P. III, 30=621B* : Ni mirum cum naturalis ista diuisio in omnibus uniuersitatibus in infinitum uniformiter seruetur.
- 29) *P. III, 154=675CD* : ita tamen ut aliud sit ipsa quia superessentialis est et aliud quod in se creat.
Cf. *P. III, 156=676A.*
- 30) *P. III, 80—82=643B* : ab omnibus segregatum subsistit extendit se in omnia et ipsa extensio est omnia.
- 31) *P. II, 132=585A* : Deus enim per se ipsum subsistens et a nullo praecedente se subsistere accipiens.....
- 32) Cf. *P. III, 180=687Bf.*
- 33) *P. III, 68=637BC* : Non enim uniuersitatis conditor omnipotens et in nullo deficiens et in infinitum tendens similia sibi solummodo uerum etiam dissimilia creare potuit et creauit. Nam si solummodo sui similia, hoc est uere existentia aeterna incommutabilia simplicia inseparabiliter unita incorruptibilia immortalia rationalia intellectualia scientia sapientia caeterasque uirtutes, condiderit in dissimilium [et oppositorum] creatione defecisse uideretur et non omnino cunctorum quae ratio posse fieri *docet* opifex iudicaretur.
- 34) Cf. *P. III, 60=634B.*
- 35) アウグスティヌスに由来する。cf. *Confessiones*, XI, 5ff.
- 36) Cf. *P. III, 130=664Bff.*
- 37) *P. III, 172=683B* : as sic de nihilo facit omnia, de sua uidelicet superessentialitate producit essentias,.....
- 38) *P. III, 58=633AB* : non apparentis apparitio, occulti manifestatio, negati affirmatio, incomprehensibilis comprehensio, [ineffabilis fatus, inaccessibilis accessus,] in intelligibilis intellectus, incorporalis corpus, superessentialis essentia, informis forma, immensurabilis mensura, innumerabilis numerus, carentis pon-

dere pondus, spiritualis incrassatio, inuisibilis uisibilitas, illocalis localitas, carentis tempore temporalitas, infiniti diffinitio, incircunscripti circunscriptio
.....

- 39) Cf. S. Gersh, *From Iamblichus to Eriugena*, Leiden 1878, p. 51.
- 40) Cf. *P. I*, 182=506B—D ; *II*, 150=592D—593A ; *III*, 261—218=703AB.
- 41) *P. I*, 62=453B : Deus ergo currens dicitur non quia extra se currat, qui semper in se ipso immutabiliter stat,.....
- 42) *P. I*, 216=521C : quae dum per se et in se immutabiliter aeternaliterque stat mouere tamen omnia dicitur quoniam per eam et in ea omnia subsistunt et ex non esse in esse adducta sunt (essendo enim eam omnia de nihilo ad esse procedunt et ad se omnia attrahit),.....
- 43) *P. II*, 50=547A : Causa siquidem si uere causa est omnia perfectissime quorum causa est in se ipsa praeambit effectusque suos priusquam in aliquo appareant in se ipsa perficit et dum in genera formasque uisibiles per generationem erumpunt perfectionem suam in ea non deserunt sed plene et immutabiliter permanent nulliusque alterius perfectionis indigent nisi ipsius <unius> in qua semel et simul et semper subsistunt.
- 44) *P. III*, 72=639C : qua ipse causa est, ea uero causatiua et omne causatiuum semper in causa subsistit.....
- 45) *P. III*, 170=682D : omnia est ut causalis omnium,.....
これは元来偽ディオニシオスの言葉である。また、アウグスティヌスの *De Gen. ad litt.* II, 6. 12 の解釈の形で次のようにも述べられている。 *P. III*, 76=640C : aliter in ipso sunt dum in primordialibus rerum causis quae non solum in deo uerum etiam deus sunt aeternaliter intelliguntur. Et ideo ait ‘ea quae ipse est’.....
Cf. *P. III*, 58=632D : Summae siquidem ac trinae soliusque uerae bonitatis in se ipsa immutabilis motus et simplex multiplicatio et inexhausta a se ipsa in se ipsa ad se ipsam diffusio causa omnium, immo omnia est.
P. III, 220=704C : quia extra ipsum nihil est et omne quod in ipso est ipse est.....
- 46) *P. III*, 182=687C : sequitur deum causam in effectibus suis fieri.
この思想も偽ディオニシオスに由来する。cf. *P. I*, 58=452ff. しかし「神が造られる」という表現は比喩であるとも解釈されている。 *P. I*, 204=516C : fieri deus dicitur figurata quadam locutione dici manifestum est.
Cf. *P. I*, 194=513A.
- 47) *P. III*, 182=687C : Non enim ex causa in effectus suos procedit quod a sui natura alienum sit.

- 48) *P. III, 170=628B* : ここに使われている *incircumfinite* というラテン語は大変珍しい言葉であって、エリウゲナは全著作中ただこの一箇所だけで用いているだけである。恐らくはマクシモスの *ἀπερίγραφος* の訳語として彼が案出したものであろう。その訳語としては *incircumscriptus* が一般的である。cf. *Maximus Confessor, I Ambigua. III, PG. XCI. 1072C* : ἀπειρον καὶ ἀπερίγραφον ; *P. I, 200=515A* : *infinite et incircumscriptum*.
- 49) *P. III, 170=682D* : *Etenim neque quidem est hoc, hoc autem non est ; neque ibi quidem est, ibi autem non est ;.....*
- 50) *Pseudo-Dionysius, De Coelesti Hierarchia IV, 1. PG. III, 177D* : τὸ γὰρ εἶναι πάντων ἐστὶν ἢ ὑπὲρ τὸ εἶναι θεότης. エリウゲナによるこの句の引用については次を参照。
E. Jeaneau, Homélie sur le Prologue de Jean, Paris 1969, Appendice II, pp. 323—326.
- 51) *P. III, 184=688CD* : *Dum ergo de diuina natura pure percipimus quod omnium principium sit et causa—est enim ANAPXOC et ANETION, hoc est sine principio et sine causa, siquidem nil praecedit quod ei principii uel causae proportionem obtineat, ipsa uero omnium quorum causa et principium est naturam creat.....*
Cf. *P. I, 58=451CD* ; *I, 204=516A* ; *II, 82=562A* ; *II, 132—133=585A* ; *IV, 741C* ; *V, 909AB.*
- 52) *P. III, 172=683A* : *Proinde ex superessentialitate suae naturae in qua dicitur non esse primum descendens in primordialibus causis a se ipso creatur et fit principium omnis essentiae omnis uitae omnis intelligentiae.....*
- 53) 動詞形は *substituere* で偽ディオニシオスの *ὑπέλιμμι* の訳語として用いられた独特なラテン語である。Cf. *P. I, 66=445B* : *Ipsius nanque creatio, hoc est in aliquo manifestatio, omnium existentium profecto est substitutio.*
P. V, 903A : *Datum itaque diuinae bonitatis est uniuersitatis substitutio,.....*
E. Jeaneau, op. cit. Appendice IV, pp. 333—335.
- 54) *P. III, 46=627C* : *Causa nanque omnium creatrix bonitas quae deus est ad hoc ipsam causam quae per-se-ipsam bonitas dicitur primo omnium creauit ut per eam omnia quae sunt in essentias ex non existentibus adduceret. Diuinae siquidem bonitatis proprium est quae non erant in essentiam uocare.*
- 55) *P. III, 182=687CD* : *Si autem quis dixerit unum aequale sibi unum gignit—nam et deus pater dum sit unum aequale sibi unum deum filium gignit—cognoscat se nimium errare. Summa siquidem sancta trinitas non est unum et unum et unum sed simplex et indiuiduum unum in tribus inseparabilibus*

substantiis, et illud unum multiplex uirtute est, non numero, et non aliquid unum est sed uniuersaliter et infinite unum, et super omne unum quod dici uel intelligi potest.

- 56) *P. III, 52=630C* : hoc est primordiales causae circa et post unum principium <uniuersale> constitutae.....
- 57) *P. II, 170=601B* : Causa itaque filii pater est et spiritus sancti, filius uero causa est conditionis principaliter causarum, earundem autem [causarum] distributionis spiritus sanctus causa est.
- 58) *P. III, 148=672D* : pater enim facit, in filio fiunt, spiritu sancto distribuuntur—, una tamen atque eadem summae sanctaeque trinitatis est operatio.
- 59) *P. III, 58=632D* : Summae siquidem ac trinae soliusque uerae bonitatis in se ipsa immutabilis motus et simplex multiplicatio et inexhausta a se ipsa in se ipsa ad se ipsam diffusio causa omnium, immo omnia *est*.
- 60) *P. II, 152=593D* : Si enim rationes rerum quas ipse in se ipso, hoc est pater in filio, creauit in ipso unum indiuiduum.....

Cf. *P. III, 72=639D*.

61) *P. II, 64=553B*.

62) *P. II, 74—76=558C* : Non dixit ante tempora aeterna—tempora enim aeterna sunt patris et filii et spiritus sancti coessentialis aeternitas in qua substantiales splendores sanctorum omniumque rerum primordiales causae aeternaliter conditae sunt ipsarumque causarum effectus et praesciti et praedestinati fuerunt—sed ante tempora saecularia in quibus causae semel ac simul et aeternaliter in principio factae ordine quodam saeculorum similiter praediffinito atque praecognito in effectus suos siue uisibiles siue inuisibiles diuina prouidentia administrante procedunt.

この世の時間が tempora saecularia と呼ばれるのに対して、永遠が tempora aeterna と呼ばれる。

63) *P. III, 52=630BC*.

64) Cf. *P. I, 36=441B* ; *I, 38=442B*.

65) *P. III, 132=665BC* : et 'erat quando non erant', temporaliter enim inchoauerunt per generationem esse quod non erant, hoc est in formis et speciebus apparere.

66) *P. I, 38=443B* : ipse nanque omnium essentia est qui solus uere est, Dyonysius Ariopagita.

Cf. *I, 208=518AB* : N. Cum ergo audimus deum omnia facere nil aliud debemus intelligere quam deum in omnibus esse, hoc est essentiam omnium subsistere.

Ipse enim solus per se uere est et omne quod uere in his quae sunt dicitur esse ipse solus est. Nihil enim eorum quae sunt per se ipsum uere est, quodcumque autem in eo uere intelligitur participatione ipsius unius qui solus per se ipsum uere est <uere esse> accipit.

- 67) *P. I, 38=443B と P. III, 170=682D にそれぞれの句が偽ディオニシオスのものとして示されている。これらのものと類似した、一見汎神論と思われる表現はほとんどすべて偽ディオニシオスから引かれる。例えば次のもの。*

P. III, 58=633A : Deus itaque est omne quod uere est quoniam ipse facit omnia et fit in omnibus, ut ait sanctus Dionysius Ariopagita.

P. III, 76=640D : Sanctus quoque Dionysius Ariopagita in capitulo de Perfecto et Vno de deo loquens, 'Vnum', inquit, 'dicitur quia omnia uniuersaliter est

.....

- 68) *P. III, 98=650D : Et his omnibus incomparabiliter altius et mirabilius mihi uidetur quod sancti Dionysii Ariopagitae auctoritate utens asseris, ipsum uidelicet deum et omnium factorem esse et in omnibus factum—hoc enim adhuc inauditum et incognitum non solum mihi sed et multis ac paene omnibus. Nam si sic est, quis non confestim erumpat in hanc uocem et proclamet : Deus itaque omnia est et omnia deus ! quod monstruosum aestimabitur etiam his qui putantur esse sapientes,.....*

- 69) *P. II, 82=561CD : Non omnino coaeterna sunt. Nam filium patri coaeternum esse omnino credimus, ea uero quae pater facit in filio coaeterna esse filio dicimus, non autem omnino coaeterna. Coaeterna quidem quia numquam fuit filius sine primordialibus naturarum causis in se factis, quae tamen causae non omnino ei in quo factae sunt coaeternae sunt. Non enim factori facta coaeterna esse possunt. Praecedit enim factor ea quae facit. Nam quae omnino coaeterna sunt ita sibi inuicem coadunantur ut nullum sine altero possit manere quia coessentialia sunt. Factor autem et factum quoniam coessentialia non sunt non coguntur esse coaeterna. Coguntur autem semper esse relatiua et simul esse quia factor sine facto non est factor et factum sine factore non est factum.*

- 70) W. Beierwaltes, 'Negati Affirmatio: Welt als Metapher', *Philosophisches Jahrbuch* 83, 2, 1976, p. 248 : Selbst-Schaffen Gottes ist demnach die Emphase des Gedankens, daß Gott *im* Geschaffenen, das von sich her nichts ist, zu dessen Grund wird (essentia omnium) und, weil er *universal* Grund ist, damit Alles in Allem wird und ist.

- 71) *P. III, 54=631A : Est igitur participatio non cuiusdam partis assumptio sed*

diuinarum dationum et donationum.....

- 72) *P. III, 56=632B* : Hinc facillime datur intelligi nihil aliud esse participationem nisi ex superiori essentia secundae [post eam] essentiae deriuationem et ab ea quae primum habet esse secundae ut sit distributio,.....
- 73) *P. III, 54=631A* : a summo usque deorsum per superiores ordines inferioribus distributio.
- 74) *P. III. 56=632BC* : Siquidem ex fonte totum flumen principaliter manat et per eius alueum aqua primo surgit in fonte in quantamcunque longitudinem protendatur semper ac sine ulla intermissione defunditur. Sic diuina bonitas et essentia et uita et sapientia et omnia quae in fonte omnium sunt primo in primordiales causas defluunt et eas esse faciunt, deinde per primordiales causas in earum effectus ineffabili modo per conuenientes sibi uniuersitatis ordines decurrunt, per superiora semper ad inferiora profluentia,.....